

享保版假名神代紀について (三)

— 訓読文としての特色 —

はじめに

先に本誌にその解題及び翻字を發表させていただいた(1)、享保版假名神代紀(以下「本書」とする)は、日本書紀神代卷上下を平仮名に書き下して記した(訓注部分は返り点付きの漢字本文に平仮名で振り仮名及び送り仮名を注す)ものである。記された平仮名書きの本文は、全体に漢字本文に忠実であつて、単純な誤記等によると思われるものを除いて、脱落・改編等はほとんどない。また細部についても、例えば瑞珠盟約章の「笠蓑」や海宮遊幸章の「風波」を、漢字本文のままに「かきみの」「かぜなみ」とする等の点に端的なように、意を採つて和文的に改めて記そうとしたものというよりは、漢字本文に忠実なも

のと言えらると思われ。つまり本書は漢字本文を逐一訓み下し、さらに平仮名書きとしたものであつて、内容の一部を抜粋したり翻案した類のものではない(2)。

*1) 杉浦克己

これに基づき、本稿はこの平仮名本文を日本書紀神代卷の訓読文としてとらえ、これを他の諸本に見える訓点から帰納される訓読文と比較・対照することによつてその特色を明らかにし、本書の成立の背景や神代紀諸伝本の変遷上の位置付けについて考察を加え、日本書紀さらには漢文一般の訓読、また日本語における漢字の用法の変遷等についての考察に資することを期すものである。比較の対象には本書に先行する神代卷の諸本(鴨脚本・弘安本・乾元本・丹鶴本等および寛文版本)を主に(3)、本書以降の諸本については必要に応じて個別事項を取り上げるのみとした。

*1) 放送大学助教授(人間の探究)

なお本書には平仮名書きの本文の右傍に、漢字本文をほぼ逐語的に注記してあり、これと平仮名本文の關係から他の日本書紀諸伝本の漢字本文とを比較検討することも、本書が依つたと思われる漢字本文の系統などを考える上でも当然重要であるが、この漢字注記は不読の文字を欠く部分があるなど必ずしも厳密に漢字本文を反映しているとはみなし難い箇所も散見し、なお慎重な検討を要するものと考え、ここでは専ら日本書紀の訓読に注目する立場から、先二稿の翻字でもこれを省略してきた。よつて本稿の考察でも訓読文としての平仮名書きの本文に考察を加えることを主とした次第である。また本書では平仮名書きの本文の左傍または文字の右肩に別訓を注記する箇所が十カ所三十語（ただし、巻上の前半部分にのみ）についてあるが、これは考察の対象に加えた。

本書の書誌的な概略は先稿にも述べた所である。その後本書と同版或いはごく近しいと思われる版本のいくつかを窺見する機会に恵まれた。詳細な調査は未了であるが一瞥の限り本書と大きく異なる点はないようである(4)。

一 文字・表記

仮名の字体と字種

平仮名書きの部分では延べて五二一九七字（踊り字・訓字・

傍書の別訓を含み、句読点などを含まず）の用例がある。本書の刊行された享保頃の一般的な仮名版本の書体・字体等については、各方面からの多くの先学のご研究があり、それらに照らして本書の仮名の書体・字体は特に大きな特徴を持つとは見えない。本書全体で用いられている仮名の代表的な書体の概略はおおよそ以下の表一のようなものである。

これらのうち「イ」の字体は、仮名本文の文字の右肩に注された別訓に見えるものである。これは巻上天地開闢章で「あしがひ」および「うましあしがひひこぢのみこと」の本文について「あしがひ」の別訓を示すために「ひ」字の右肩に注された一連の五例（二丁裏七行〜四丁表五行）のみに見えるのであつて、本文及びその別訓とは若干性格が異なり、平仮名本文とは区別した片仮名の振り仮名と見るべきであろう。なお平仮名本文の文字の右肩に別訓を注した例は此処以外には見えない。

「勢」字を字母とする「せ」は下巻で「おほせ」（海宮遊幸章・巻下五十三丁表五行）と文末の命令形に用いられた一箇所のみに見え、しかもこれは行末であつて特殊な例と考えられる。またこれに関連して書体を一瞥すると、巻上と巻下では若干筆の運びが異なるようにも見えるが、あくまで印象の域を出ないほどの軽微な差異である。但し上下各巻の各々の内部ではほとんど書体についての差異は感じられない。

「ん」字は総数で四七〇の例が見える。これらのうち字音の

〈表二〉享保版假名神代紀 仮名字体表

つ	ち	た	そ	せ	す	し	さ	こ	け	く	き	か	お	え	う	い	あ
はつ つり	ら 地	と 考 ふ た	そ ろ	せ を 勢	次 を す お は す	し 志	さ 内	こ お	ま け お	く を	か き	お ら り	た お 抄	え	う	い は い	あ は
や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に	な	と	て
な や	ゆ も も	た わ	む	み え と	は ま す	か	へ	ぬ ふ ふ	ひ お	い は く	の れ 乃 種 志	ね ぬ	ぬ に ぬ よ う	な に ぬ よ う	な に ぬ よ う	と と と 空	て ま く
読点	句点	重符	訓字	合字	ん	を	ゑ	ゑ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	ゆ	
。	。	、 、 く	と	と	ん	を 成	ゑ	ゑ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	ゆ	

表記(主に撥音韻尾)に用いられた七二例、及び撥音便に用いられた五八例については後の項で改めて取り上げる。これら以外には助動詞「む」に用いられた例が終止形一八八例、連体形三八例があるが、助動詞「む」の総用例二二七のうちいわゆるク語法で「まく」の形で用いられた一例を除く全例が「ん」表記となつてゐることになる。近世の漢文訓読における助動詞「ン」の表記については、齋藤文俊氏に詳細な御論(5)があつて、「ン」表記がこの時代の版本には一般的であつたことがわかるが、これに照らすと、平仮名書きであつても本書は、当時一般の漢籍の点本の表記に近いものであると言える。

己 残る「ん」の例は、神名で「あまてらすおほんがみ」三四例の他、「いんかしきのみこと、かなほひのかみ、かんみむすびのみこと、かみやまといはれひのみこと、かみやまといはれひこほゝでみのすべらみこと、くまのゝおしほんのみこと、さるたひこのおほんがみ、すみのえのおほんがみ、ちがへしのおほんがみ、とよくんぬのみこと、よみどにふさがりますおほんがみ」各一例。「神」を造語成分に含む「かん・」の形が「もろかたち」四例、「か人たち、かんみぞ、かみやらひ」各二例の他、「かんさり、かんつどへ、かんほさきほさき、かんがかり、かんごと、かんさが、かんとものつるぎ、かんとものを」各一例。同じく「上」を含む形が、「かんつえ」二例の他「いそのかんのみや、かんつせ、とりかんのだけ、ふたがんのだけ」各一例。

同じく「おほん、おん」を含む形が「おほんがみ、おほんこと」各二例の他、「おほんたから、おほんもの、おんはじ、おん」各一例。その他に、「をんな」五例、「さかんなる、いんさき、をんなご」各三例、「ねんごろなり」二例、「なんそれぞ、なんすれぞ、はんべり、なんすれ、ほとんど、あまのたんざけ、いんはたとの、かんとりのかに、たかなな、ひんがし」各一例がある。個々の語については若干の問題を含むものもあり、他本と比較した上での語彙上の異同は後の項で改めて取り上げるが、本書ではほぼ撥音の表記として「ん」字を専用していたものと見ることができると思われる。

なお、語中語尾に「む」字が用いられた例は異なり語数で七七語、総数二七八例見え、このうち撥音に関係すると思われるものは、「いむべ(忌部)」およびその複合語四語七例と「かむ(神)」を含む語九語一九例である。先に挙げた助動詞「む」の例をはじめ、字音の撥音韻尾等は本書では撥音には専ら「ん」が用いられてるのであつて、これらの「む」は撥音とは区別して用いられてゐると思つてよいのではないかと思われる。

また平仮名書きのうち、「たま」の部分で「玉」と漢字表記した例が三七〇カ所に見える。これは「うけたまはる」に一例、「たまふ」(動詞・補助動詞とも)一九五例、「のたまふ」一七四例に見えるもので、特に後の二語に集中している。「たまふ」は全二一五例中九〇・八%、「のたまふ」は全二〇二例中約八六・

五%が「玉」を含む表記であり、むしろこの方が本書内の標準的な形であると言える。活用形や前後に続く語などによる偏りは必ずしも明確ではないが、「たまふ」の場合、動詞として用いられた例では、「玉」を含まない表記が若干多いようである。なお「うけたまはる」は全体中当該の一例のみしか用例がない。

「タマ」の「玉」表記は、日本書紀の訓点付の写本・版本にも多く見えるものであつて、特に中世末から近世の頃のものにはこれが著しい。本書も何らかの底本（訓点付の漢文伝本）によつて記されたと考えれば、「玉」表記も底本のそれに従つたものと見ることが出来る。しかし一方でこれら訓点付の漢文伝本では「たま玉」以外にも「トキキ時・寸」、「コト事」、「タマフ給」、「イフ云」なども見えるのであつて、本書には「たま」のみしか見えないことと考えあわせると、本書の「玉」表記は、訓点付の漢文底本から直接受継いだものではなく、平仮名表記の中の一つとして位置付けるべきであると考えの方がより穏当と思われる。

仮名遣

本書に見られる仮名遣上の特色を見るについて、いわゆる歴史的仮名遣を基準として考えた場合、これに合致しない例としては次のようなものがある。(なお各項末尾の括弧内の数は、同じ語で合致する例の数である。)

先ずア行とワ行に関わるものとしては、

「イ」を「ゐ」とした例	オイ(於)	✓おゐ	一例(十二)
クイ(悔)	✓くゐ	一例(一)	
ヒイ(引)	✓ひゐ	一例(四)	
「ヒ」を「ゐ」とした例	スマヒ(住)	✓すまゐ	一例(〇)
ニヒシ(新)	✓にゐし	三例(〇)	
「キ」を「い」とした例	キヤマフ	✓いやまふ	一例(〇)
「エ」を「ゑ」とした例	エヤ(感動)	✓ゑや	二例(〇)
キコエ(聞)	✓きこゑ	一例(〇)	
ツクエ(机)	✓つくゑ	一例(〇)	
ツクエモノ	✓つくゑもの	二例(〇)	
マミエ(見)	✓まみゑ	二例(五)	
「エ」を「え」とした例	ユエビト(湯人)	✓ゆえびと	一例(〇)
「へ」を「ゑ」とした例	ヤへ(八重)	✓やゑ	一例(七)

「エ」を「へ」とした例

ユエ(故) 〱 ゆへ 三例(二〇)

「オ」を「を」とした例

オブシ(首) 〱 をぶし 一例(〇)

オヨビ(及) 〱 をよび 三三例(二二)

オヨブ(及) 〱 をよぶ 九例(二二)

オシハナツ 〱 をしはなつ 一例(三三)

オト(弟) 〱 をと 一例(六)

オトタナバタ 〱 をとたなばた 二例(〇)

オトノミコト 〱 をとのみこと 三三例(三三二)

オノコロジマ 〱 をのころじま 一例(六)

オノヅカラ 〱 をのづから 一例(二五)

オモクルル 〱 をもくるる 一例(二)

「ヲ」を「お」とした例

アラビエ(青竹) 〱 あおびえ 一例(二)

ヲサム(収・納) 〱 おさむ 四例(三三)

ヲシフ(教) 〱 おしふ 一例(二〇)

ヲトメ(夫婦) 〱 おとめ 一例(四)

ヲンナ(女) 〱 おんな 一例(八)

ヲリ(居) 〱 おり 二例(七)

がある。なお「ヲトメ」については「夫婦」の他に「乙女」の例が一五あるがこれは全て「をとめ」となっている。また「オシハナツ」については、類似の「押し……」の形の動詞の例が他に六例あるが、全て「おし……」の表記となっており、「アラビエ」についても「青……」の形の他の語の例が一八あつてこれも全て「あを……」である。「ツクエ」については複合語も含めて三例が全て「つくゑ」の表記であるが、古くから「ツクエ」とした例も見える語であり、必ずしも異例とは言えないかも知れない。

「ジ・ヂ・ズ・ヅ」に関わるものとしては、

アヂキナシ 〱 あじきなし 一例(三三)

ハジク(弾) 〱 はぢく 一例(〇)

ミジカシ(短) 〱 みぢかし 二例(〇)

がある。

ハ行とワ行・ア行・ヤ行に関わるものとしては、

アワ(泡) 〱 あは 二例(三二)

アルイハ(或) 〱 あるひは 一例(〇)

オヒ(追ヒ) 〱 おい 一例(〇)

サイハヒ (幸)	∨ さひはひ	一例 (○)
トヒ (問ヒ)	∨ とい	一例 (○)
ミサキバラヒ	∨ みさきばらい	一例 (○)
サカエ (栄)	∨ さかへ	一例 (○)
ミエ (見エ)	∨ みへ	一例 (○)

の他、活用語連用形のウ音便形の「・・ウ」を「・・ふ」とした例が、

動詞			
ウカウ (誓)	∨ うかふ	一例 (○)	
オウ (追)	∨ おふ	四例 (○)	
オモウ (思)	∨ おもふ	三例 (○)	
コウ (請)	∨ こふ	二例 (○)	
タマウ (給・賜)	∨ たまふ	二例 (○)	
ツミナウ (罪)	∨ つみなふ	三例 (○)	
トウ (問)	∨ とふ	一五例 (○)	
マウ (舞)	∨ まふ	一例 (○)	
形容詞			
オナジウ (同)	∨ おなじふ	一例 (○)	
ナガウ (長)	∨ ながふ	一例 (○)	

また若干性格は異なるが、いわゆる長音に関わるものとして、

オホシカフチ (凡河内)	∨ あふしかうち	一例 (○)
モロトモノヲ (諸部)	∨ もろともなふ	一例 (一)

がある。

なお「アフ」についてはこれら以外に、神名に関連して「アワナギ」の形を含むものが三例あるが、これは全て「あわなぎ」となっている。

後の項でも改めて述べるが、活用語連用形のウ音便については、動詞のウ音便の例はここに挙げたもののみであって、全例が「・・ふ」表記となっている。形容詞のウ音便形は他に六語一一例がありこれは「・・う」表記である。従って、ウ音便形は動詞では「ふ」、形容詞では「う」と一応の書き分けがあると考えられる。動詞については、ハ行活用の語という意識が働いているのではないかとも思われる。

以上のような例の他は、異例とは判断しかねるため右には挙げなかったものがいくつもある。先ず「葦牙」について「あしがひ」「あしがい」の両形が見えるが、これは先の文字・表記の項でも述べたように、「あしがい」の形が本文の「あしがひ」の「ひ」字の右肩に傍書された例であって、両形併記となっているものである。これに関連しては「たかがひ」の例があるが、

これには傍書はない。

また「かなしぶ」六例、「あはれぶ」「くるしぶ」「たしなぶ」各一例のように「ム」と「ぶ」に関わる例があるが、これらについては「かなしむ」「あはれむ」「くるしむ」「たしなむ」の例はなく(類似的の例としては「あやしむ」四例がある。「あやしむ」の例はない。)バ行・マ行活用を一定に使い分けているようである。これに関連して「皇孫」について「すへみま」三八、「すへみまご」一の例があるが、おそらくこれは「すへみま」の形に基づくものであって、本書で他に二例見える「すめみま」と関連するものであろう。(但し本書には「すへみま」の例はない。)

己 以上を一瞥すると、本書では歴史的仮名遣に合致する例としない例が個々の語で混用されているというよりは、それぞれについて一定の何らかの書き分け意識がある程度はあったのではないかと考えられる表記である。このように考えた場合の異例が特定の巻次や章段に集中するか否かは、それぞれの単語の用例が遍在することもあって、必ずしも明確ではないが、「ウゝお」「オゝを」の例は巻上宝鏡開始章の後半付近に比較的多く見えるなど、若干の偏りが看取でき、原稿の著者自身かあるいは版下書きかはなお慎重に考慮しなければならないが、手が何らか異なることによるのではないかとの想像もある程度は可能ではある。

句読点

これらの他に本書の平仮名本文には圏点「。」が句読点として用いられている。先二稿の翻字(一)(二)ではこれらの圏点のうち、該当字の下中に注されたものを読点、下右に注されたものを句点とみなしたが、これに従うと句点三五九五、読点九四五の例が見える。このような区別の上に立って用いられているとみてほぼ大過ないものと思われるが、先稿でも述べたようにこの使い分けは、現行の句点・読点の付け方と完全に一致するものではなく、また本書の使い分けの基準も必ずしも一定しているとはみなし難い。読点の加點箇所は、現代語の表記法でも実際にはかなり揺れがあることが指摘されているが、句点はいわゆる文末に付けるという点ではほぼ一定している。これに従って文末の加點に着目してこの間をまとめたものが次の表二である。

これを見ても明らかのように、圏点の使い分けにはかなり偏りがあって、特に他の章がほぼ句点(下右圏点)と読点(下中圏点)が同数であるのに対して、巻上の神代七代章(四神出生章)と巻下の三章では、読点が極端に少なく、特に巻下海宮遊幸章及び神皇承運章では全く用いられていない点は著しい。もともと楷書漢字の場合に比べ平仮名への加點位置はかなり微妙にならざるを得ず、特に版本の場合では版下書きや彫り師の手も考慮に入れなければならないことは事実であるが、この句読圏

卷 下			卷 上							卷 次	
神皇承運	海宮遊幸	天孫降臨	宝劍出現	宝鏡開始	瑞珠盟約	四神出生	大八洲生成	神代七代	天地開闢	章 段	
44	1004	1103	152	148	169	644	257	10	64	句点 (下右) 総数	
0	0	167	232	233	186	67	13	2	45	読点 (下中) 総数	
30	419	508	131	107	98	341	159	8	55	文末に句点	
0	0	22	66	25	33	11	0	0	14	文末に読点	
14	585	595	21	41	71	303	98	2	9	文末以外に句点	
0	0	145	166	208	153	56	13	2	31	文末以外に読点	
1	16	26	12	8	10	18	9	0	2	文末に無点	

〈表二〉

点の使い分けの偏りを見る限り、版下以前の原稿作成の段階(いわゆる「著者」)に複数の者の手が関与していたのではないかと
の想像も否定できないものがあると思われる。

字音表記

日本書紀の訓読は一般に「訓読み」のみを用い、「音読み」をしないことが原則であつて、多くの伝本がこれに従っているが、
訓注部分の被注本文漢字についてはこれを音読して字音を加点する伝本がかなり存する。この訓注部分の字音の表記が、諸本の訓読の系統を考える上で一つの指標になりうるのではないか
ということはい前にも述べ、その一端を示したところである(6)。

本書も訓注部分は本文部分と異なつて、返り点付きの漢字本文に平仮名で振り仮名・送り仮名を注し、当該の被注漢字については字音が振り仮名として付されている。字音注記のある被注漢字は、全体で延べ二六六字、異なり字数で二六〇字である。

この字音表記について、神代巻諸本の間で比較的差異が顕著な点は撥音韻尾の表記である。本書では「三、人、全、劔、占、君、含、善、喧、噴、坂、天、妍、尊、山、干、彦、探、散、文、本、泉、津、埜、添、然、燠、珍、産、男、昞、磐、神、端、箭、籤、糞、船、見、諄、談、連、酸、間、闌、雝、頓、蹞、浪、魂」の五一字がこれに関係すると思われるが、全て「ん」の表記となっており、先に助動詞「む」等の語につい

て述べたのと同様に、撥音の表記として、字音注記の部分でも「ん」字が専用されていることがわかる。これに対して他本では、

	ン表記	ム表記
弘安本	三〇	一〇
乾元本	三	五四
丹鶴本	一	四
水戸本	一三	二三
寛文版本	六五	〇

(なお鴨脚本には当該の字音表記はない)

杉浦克己 となっていて、寛文版本が本書と同様に全て「ン」表記として
いる。

その他、一般的な字音表記と異なると思われる例は、清濁に
関係するものとして「乃(ダイ)たい、凝(ギヨウ)きよう、
土(ド)と、女(チヨ)ちよ、尿(デウ)テウ、岐(キ)ぎ、
沫(ハツ)ばつ、燻(セン)ゼン、覓(ヘキ)べき、談(タン)
だん、勝(パウ)はう、降(カウ)がう」(括弧内の片仮名が一
般的な字音表記、後の平仮名が本書に見られる例。以下同様。
の十二字を挙げることができるが、一般に版本の濁音符は厳密
とは言い難い面もあり、必ずしも確かな論拠とは成り得ない点

を考慮しなければならない。

拗音に関わるものとしては、「中(チュウ)ちう、凶(キョウ)
けう、勝(シヨウ)しやう、喧(クエン)けん、宮(キユウ)
きう、帛(チヨウ)てう、胸(キヨウ)けう、興(キヨウ)こ
う、蹴(シユク)しく、隈(ワイ)くわい」の十字を挙げるこ
とができる。これらのうち「中、凶、宮、蹴」の四字について
は、他の日本書紀諸本の当該箇所でも拗音形でない「チウ、ケ
ウ、キウ、シク」が用いられているが、「喧、帛、胸、興」の四
字は他本では「クエン、チヨウ、キヨウ、キヨウ」で、本書は
特にヤ行仮名を介した拗音の表記を取って避けているようにも
思われる。一方、一般的な字音表記と合致する例としては、長
拗音八例を含む三四例がある。これらのうち「勝(シヨウ)し
やう」字はヤ行仮名を介した表記であるが、いわゆる開合につ
いては区別をしておらず、拗音、特に長拗音の表記はかなり混
乱している。「隈」字については、他の日本書紀諸本でも当該箇
所で「クワイ」としており、「ワイ」ではなく「クワイ」と広く
読まれていた可能性がある。

入声韻尾の表記に関わると思われるものとしては、「十(ジウ)
じふ、立(リフ)りう」の二字がある。いわゆる「フ入声」の
韻尾の表記については、他の日本書紀諸本でもかなり揺れのあ
るところであり、本書でも一貫していないようである。

ア行ワ行の仮名遣に関連しては、「威(キ)い、吹(スイ)す

い、於(ヲ)お、瑞(ズキ)ずい」の五字、いわゆるオ段長音の開合の仮名遣いでは先に挙げた拗音に関わるもの他に「鉤(コウ)かう」の例がある。先の「仮名遣」の項でも述べたように、本書ではア行ワ行やハ行転呼などの表記について、いくつかの語で仮名遣上の混乱が見えるが、これは字音の表記においても同様であり、いわゆる歴史的仮名遣に沿った表記とここに挙げたような異例が混在している。またバ行マ行の通用に関連して「霧(フ)む」の例がある。他の日本書紀諸本では「フ」と漢音の方を採っているのに対して本書が呉音「ム」とするのは特徴的であるが、これは先に仮名遣の項で述べた、マ行とバ行の表記の問題と関係があるのかもしれない。

その他では「刈(レツ)げい、穢(ワイ)え」の二字が異例であるが、これらの字の字音については、他の日本書紀諸本でもかなり揺れがあり、一定の読みに定まっていなかったのではないかと思われる文字である。

二 語彙

本書には先の表記の問題を考慮した上で、なお明確な誤記と思われる例が「のたまく」(「のたまはく」(巻上六丁裏三))、「やまひををさむるまさを」(「まさを」(巻上六四丁裏七))、「みもとのかみ」(「みとものかみ」(巻下一七丁裏七))、の三箇所あ

る。これを補正した上で、本書の仮名本文の総語数は二一四四〇語(先に挙げた訓注部分の字音注記を除くと総語数二一一一二語)、異なり語数は先の項で取り上げた仮名遣い上の異同を補正した上での表記ベースで二二九八語である。これを流布本である寛文版本の神代巻上下に見える語(字音表記を除き、同様の補正をした上で異なり語数二二九〇語)と比較してみた結果、濁点の有無にのみよる差異を除いて、本書にあつて寛文版本に見えないものとして異なり語数で九六語(総数二一一語)を得た。これに代表的な神代巻上下の写本である鴨脚本(鴨)・弘安本(弘)・乾元本(乾)・丹鶴本(丹)・水戸本(水)、及び現行の校本である『国史大系本』『古典文学大系本』などを加え、若干の考察を加えた結果を以下に示す。なお表示方法は、「本書の例(用例数)寛文版本での該当語」であり、他本についての考察を更にこれに加えている。

〈神名〉

- ・あまのくしづおほくめ(一)〈アメノクシツオホクメ
- ・あまのめひとつのかみ(一)〈アメマヒツツノカミ
- 丹本に「・・ノマ・」の加用例あり。
- ・あめのにぎしくにのにぎしあまつひこほのにぎのみこと
- (一)〈アマノニキシ・・・
- ・あめみなかぬしのみこと(一)〈アマノミナカヌシノミコト

国史大系所引東山御文庫本に「アマミナカ・・・」の例あり。

いせのみこと(一)∨無点

いだけるのかみ(二)∨イソタケルノカミ

いだけるのみこと(二)∨イソタケルノミコト

古典文学大系本は両例ともに「イダケル・・・」とする。

いはれひこのみこと(一)∨イハアレヒコ・・・

いはれひこほほでみのみこと(一)∨イハアレヒコ・・・

古典文学大系本は両例ともに「イハレヒコ・・・」とする。

うきふのとよかひのみこと(一)∨ウキフノトヨ・・・

かむたかみむすびのみこと(一)∨タカンミムス・・・

他本は「・・・タカミムス・・・」とする。

かむやまといはれひこのみこと(二)∨イハアレ・・・

かむやまといはれひこほほでみのみこと(二)

∨イハアレ・・・

かんやまといはれひこのみこと(一)∨イハアレ・・・

かんやまといはれひこほほでみのすべらみこと(一)

∨イハアレ・・・

以上四例、先の「いはれひこのみこと」に同じ。

たおきほおひのかみ(一)∨タキオヒノカミ

弘・乾・丹・水本は「タオキホオヒノカミ」とする。

たかみむすび(二)∨タカンミムスビ

たかみむすびのみこと(二七)∨タカンミムスビノミコト

以上二例、先の「かむたかみむすびのみこと」に同じ。

つちいかづち(二)∨トノイカヅチ

乾本に「ツチ・・・」の加点あり。

なきさはのめのみこと(一)∨ナキサハメノミコト

弘本に「ナキサハノメ・・・」と訓める加点あり。

のいかづち(一)∨ノツチ

他本に類例なし。

ひこいせのみこと(四)∨ヒコイツセノミコト

他本に類例なし。

ひこいはいひのみこと(一)∨無点

他本に類例なし。

ひこさちのかみ(一)∨ヒコサシリノカミ

国史大系所引阪本氏本、及び古典大系本は「ヒコサチノカ

ミ」とする。漢文本文では「彦左知神」であり、「左知」

を音仮名とつた訓みである。

みけのみこと(一)∨ミケイリノミコト

漢文本文では本来「三毛入野命」とあるべき所を、「入」

字を落とした故の訓みと思われる。本書仮名本文右傍の漢

文本文注記にも当該箇所「入」字はない。ただし別の箇

所には「みけいりののみこと」の例三例があり、傍書の漢

字本文にも「入」字がある。

〈名詞など〉

- ・あなうら (一) ∨ ・ウラ
- 海宮遊幸章で「足占」の訓みとして見える語であるが、寛文版本では「占」字に「ウラ」とするのみで不確実。
- ・あねのみこと (一三) ∨ ナネノミコト
- 他には丹本に「イロネノミコト」の例が見える。
- ・あはふ (一) ∨ アハフダ
- 鴨本に「アハウ」の例あり。
- ・あまのやそがは (一) ∨ アマノヤソガハラ
- 丹本に「アマノヤソガハ」と訓める例あり。
- ・あめのやちまた (一) ∨ アメノヤノチマタ
- 鴨・弘・乾・丹・水本には「アメノヤチマタ」の例あり。
- ・いささ (一) ∨ イソササ
- 他本共に「イソササ」。
- ・いせ (三) ∨ 無点
- 他本共に無点。
- ・いださ (二) ∨ イソダサ
- 他本共に「イソダサ」。但し丹本に「イスタ」の例あり。
- ・いぬしろ (一) ∨ イヌ
- 他本共に「イヌ」
- ・おほせごと (一) ∨ ノタマフコト
- 他本に類例なし。
- ・おほはがり (一) ∨ カリ
- 他本共に「オホハカリ」とする。これは元々寛文版本の当該箇所「大葉」字に「不讀」の注記があることによると思われる。
- ・かがみつくりべ (一) ∨ カガミツクリ
- 国史大系本所引阪本氏本に「カガミツクリべ」の例あり。
- 古典文学大系も「べ」を入れて訓む。
- ・かんとりのくに (一) ∨ カトリノクニ
- 諸本共に「カトリノクニ」とする。
- ・くめべ (一) ∨ クメ
- 古典大系本は「クメベ」とする。
- ・くるしび (二) ∨ クルシミ
- 鴨・弘・乾・丹・水本に「クルシビ」の例あり。
- ・さちがへ (二) ∨ 無点
- 鴨・乾本に「サチガへ」の例あり。なお弘・水本は「カヘサチ」とする。当該の漢字本文は「易幸」(寛本巻二・二三丁表一行)であり、「カヘサチ」は漢字本文のままに読んだ形、本書の「さちがへ」は返読した形であろう。
- ・すへみま (三八) ∨ スメミマ
- ・すへみまご (一) ∨ スメミマ
- ・すへらみこと (一) ∨ スメラミコト
- 先の「仮名遣」の項で述べたように「メベ」の転換と、

「べへ」通用表記の結果生じた語形と考えられる。

・そししのむなくに(二)ソシシノムナソフクニ

他本共に「ソシシノムナソフクニ」とする。

・そほり(一)ソフリ

鴨・弘・乾・水本に「ソホリ」の例あり。

・たますりべ(一)タマスリ

古典大系本は「タマスリベ」とする。弘・乾本は「タマツ

クリ」

・たまつるべ(一)タママリ

他本には「タマノマリ」の例もあり。国史大系本所引阪本

氏本に「タマツルベ」と訓める例あり。

・ちくらおきど(二)チクラノオキド

弘・乾・丹・水本に「チクラオキド」の例あり。

・ちひとびき(一)チビキ

他本共に「チビキ」

・ともなふ(一)トモノヲ

他本共に「トモノヲ」とする。丹本は「トモ」とのみ記し

不確実。

・はいと(一)ハイトン

他には丹本に「ソヤ」の例がある以外は、各本とも無点。

『古典大系本』は「ハヤヒト」とする。

・ははきもち(三)ハウキモチ

弘・乾・丹・水本に「ハハキモチ」の例あり。

・ひま(一)無点

四神出生章で「間」字の訓みとして見える語であるが、他

本は共に無点。

・まどこおほふすま(四)マトコオフノフスマ

他では、鴨・弘・乾本が「マトコオフスマ」とする。

・まめふ(一)マメフダ

鴨本に「マメウ」の例あり。乾本は「マメフ」とのみ記す

が、先の「アハフダ」の例から推して「マメフダ」の省略

表記と考えられる。

・みうたよみ(一)ウタヨミ

他本共に「ウタヨミ」とする。

・みぎ(一〇)無点

・みぎり(一)無点

以上二例、弘・乾・水本は「ミギム」とする。この三本に

「ミギ」の例もあるがいずれも「ミギリ」の撥音便形の無

表記形とも考えられる。

・みさきばらひ(一)サキバラヒ

国史大系本所引熱田神宮本に「ミサキバラヒ」の例あり。

・もろかみ(一)モロカランダチ

・やう(一)ヤ

漢文本文で「八日」の箇所についての「やうか」の訓み。

他本では「ヤヒ」「ヤカ」とする。(本書も他の箇所では「ハ」字は「ヤ」である。)

〈副詞など〉

- ・おほよそ (一) ヲ スベテ
丹本に「オホヨソ」の例あり。
- ・ことごとに (一) ヲ コトゴトク
すこし (三) ヲ スコシク
弘・水本に「スコシ」の例あり。他に丹本に「スコシキ」の例がある。
- ・なんそれぞ (一) ヲ ナンスレゾ
寛文版本の他の箇所では「ナンスレカ」もある。本書にも他の箇所に「なんすれぞ」の例が一例あり「なんそれぞ」は誤記の可能性もある。
- ・ひとへに (四) ヲ ヒトツニ
他には「モハラ」とする例もある。
- ・ほとんど (一) ヲ ホト
海宮遊幸章で「殆」字の訓みとして見える語であるが、寛文版本には「ホト」とするのみで、不確定。他には乾本で「に」のヲト点を注した例がある。

〈動詞〉

- ・あはれぶ (一) ヲ カナシム
丹本に「アハレブ」と訓める加点あり。
- ・うらなふ (一) ヲ ウラフ
丹本に「ウラナフ」の例あり。
- ・おふす (五) ヲ オホス
・おほほす (三) ヲ おほらす (一) ヲ オホス、オボホル
弘・乾・水本に「オボホス」の例あり。
- ・かうふる (一) ヲ カガフル
乾・水本に「カウフル」の例。弘本は「カフル」とする。
- ・くはふ (一) ヲ 無点
当該箇所(神皇運章一書第二)の「加」字は諸本共無点であるが、別に天孫降臨章本伝で「配」字の訓みとして国史大系本所東山御文庫に「クハフ」の例が見える。
- ・くるしぶ (一) ヲ クルシム
弘・乾・丹本に「クルシブ」の例あり。
- ・さかる (一) ヲ サカリニ
海宮遊幸章で「壮麗」の訓みとして見える語であるが、本書が「さかりうるはし」とするのに対し諸本は「サカリニウルハシ」とする。
- ・さばへなす (一) ヲ サバヘ
天孫降臨章で「如五月蠅」の訓みとして見える語であるが、

本書が「さばえなす」とするのに対し、寛文版本では「サバヘノゴトク」とする。鴨・丹本には「ナス」の読み添えがあつて、「サバヘナス」と訓める。

・しきもす (一) ∨ シキモフ

弘・乾・水本に「シキモス」の例あり。

・したふ (一) ∨ シノブ

弘・乾・水本左訓に「シタフ」の例あり。

・たく (一) ∨ ヤク

宝鏡開始章で「焼」字の訓みとして見える語であるが他本

共に「ヤク」とする。

・たしなぶ (一) ∨ タシナム

先の「くるしぶ」等と異なり他本共に「タシナム」とする。

・のごふ (一) ∨ ヌグフ

乾本に「ヌグフ」の例あり。

・ふづくむ (一) ∨ フツク

国史大系本所引東山御文庫本に「フツクム」の例あり。

・まじはる (一) ∨ マジル

乾・丹本に「マジハル」の例あり。

・まなぶ (一) ∨ ナラフ

乾・水本に「マナブ」の例あり。

・むすぶ (一) ∨ 無点

海宮遊幸章で「結」の訓みとして見える語であるが、他本

共に無点。

・めとる (一) ∨ トル、アフ

天孫降臨章で「娶」字の訓みとして見える語であるが、「娶」字は他本では「トル」「アフ」「マク」等とする。当該箇所ではないが丹本に一箇所「娶」字を「メトル」とする例がある。なお、本書でも他の「娶」字に当たる箇所は「あふ」「とる」である。

・よそほふ (一) ∨ ヨソフ

他本共に「ヨソフ」とする。

・わらふ (一) ∨ ニクム

四神出生章で「悪」字の訓として見える語であるが、乾本に「ワラフ」の例がある。

〈形容詞〉

・いちじるし (一) ∨ イチシロシ

・しるし (一) ∨ シロシ

乾本には「イチシルシ」と訓める加点がある。

・とほひろし (一) ∨ トホシロシ

他本にも類例はない。

・ぬるし (一) ∨ ユルシ

弘・乾・水本に「ヌルシ」の加点あり。

・ひし (一) ∨ チヒサシ

他本に類例なし。

〈助詞〉

・で(三)〜「ズシテ」など

接続助詞「デ」の用例は、丹本に見えるのみ。

〈その他〉

・うれしにえや(二)〜ウレシヤ

続く一書で「あなにえや」という読みがあり、これに合わせたものか。

以上を一瞥すると、先ず著しいのは寛文版本には見えない語が全体で、総異なり語数二二九八語中九六語(約四・二%)、総語数二一一二〇語中二一一語(約一・〇%)という点である。これから考えると、比較的寛文版本に近い語彙上の特色を本書は持っているということが言えると思われる。さらに「アメノヤノチマタ」や「タカンミムスビ」のように、寛文版本自体が他の諸本とは独自に異なっている語については、逆に他の諸本に多く見られる形を採っている点も注目される。

また、右に挙げた語のいくつかは、主に比較した六本の内では丹鶴本に、国史大系本に引かれた諸本の内では東山御文庫本及び阪本氏本に比較的よく一致する点も重要であろう。丹鶴本は覆刻本ではあるが神代紀諸本の中では鴨脚本と共に比較的

態を有するとされるもので、他の伝本に対して漢字本文の校異や訓読の上でも異なる点が多く、或いは中世以前の神代紀の一斑を探る資料となり得るのではないかと考えられるものである。これに比較的近い点が見えることは、本書の成立にある程度古い時代の神代紀の訓読が関与していた可能性もあり得るのではないか。東山御文庫本及び阪本氏本の両本については、原本未見のため何とも致し難いが、国史大系本の「異訓」表示は、必ずしも各本の訓を網羅したものではなく、底本たる寛文版本に対して差異の顕著なものを挙げる傾向が見え、ここで見えた本書との一致が、東山御文庫本・阪本氏本の訓読自体の特色に依るものか、あるいは一部に国史大系本の異訓の挙げ方が影響しているのかについて、なお慎重に考慮すべきではあると思われる。

以上のように全体として他本との比較検討は可能であるが、いずれにしてもここで主に取り上げた、鴨・弘・乾・丹・水及び寛文版本の六種の中では、本書はやはり寛文版本に最も近いのであって、敢えて憶測するならば、寛文版本に主によりつても、他の何本かを斟酌しつつ訓み下して平仮名書きとした、ということであろうか。

大略は右のように考えて大過ないものとは思われるが、個別にはいくつか問題を含むものもあり、右の一覧からいくつかを抽いて以下に更に若干の考察を試みたい。

先ず特徴的なのは、いわゆる逆接の接続助詞「で」が見えることである。右にも挙げたように管見の限り他本では丹鶴本に一例を見いだすのみである。日本書紀に限らず一般に漢文訓読において「で」が用いられることは、少なくとも近世以降は希と思われるが、これから推すと、この例は和文的な要素を本書が一部に持っていることの証左とも言えると思われる。同様のことは「八日」についての「やうか」にも言えると思われる、さらには「まじはる」「ひとへに」、さらには「おほよそ」「さちかへ」等にもあるいは援用して考えることができるのではないか。

己 浦 杉
また、本書が神代卷上下全体を全て読み下したものであるため、他の訓点付き漢字本文による諸本では悉く無点となっている箇所も載せている点は本書の価値の一つと言えるであろう。また濁点が比較的多く付されている点も大きい。これに関連しては、濁点の有無にのみ関わることで右には挙げなかったが、「もぢふ」(海宮遊幸章)の一例が端的である。これは他の諸本では「モチフ」となっている語であるが、漢字本文の当該部分「捫」字が「モチフ」ではなく「もぢふ」である点を明確に示している点で、本書の著者の見識が窺われる。「モチフ」はおそらく「捻る」のような意と解されているが、神代紀の当該例唯一であって、問題を有する語ではあり、本書の例は有力な資料の一つである。

三 語法

本書の仮名本文を訓読文として見た場合、全体にわたって語法の上で他本との差異が最も顕著なのは、音便と敬語であろうと思われる。従って以下にこの二点及び個別的ないくつかの事項を取り上げて、考察を試みたい。

音便

本書の仮名本文には、イ音便・ウ音便・促音便・撥音便の例として、異なり語数で六五(同一語の異なる音便形は別語として計数)、総数で五二五を拾うことができる。但し、の中には「もつ(以)」及び「よる(依)」に「て」が続く場合の促音便形の無表記形「もて」「よて」がそれぞれ二五五例と六六例含まれる。これらには動詞連用形はみなし難いものも多く含まれるため、一応全例を除外し(但し、同促音便形の「つ」表記は除外せず)て残る六三語について以下に、先の語彙の項と同様、寛文版本及び鴨脚・弘安・乾元・丹鶴・水戸の各写本と比較対照した結果を、各々の語についての非音便形の用例数も併せて次の表三に示す。(表示は「音便形の用例数」/「非音便形の用例数」である。)

なに	いかに	をはる	よぶ	やむ	めぐむ	ふむ	にくむ	なる	つつむ	すすむ	しる	さる	かむ	およぶ	いたむ	擬音便	をどる	よる	もつ	むかふ	とどまる	きる	かへる	かたる	いたる	促音便(「つ」表記)	かへる	いたる	促音便(無表記)
一 ／ 一	一七 ／ 一〇	三 ／ 二〇	二 ／ 一	一 ／ 一	二 ／ 一六	一 ／ 一〇	二 ／ 一	一 ／ 一	一 ／ 二〇	一 ／ 六	二 ／ 九	一 ／ 四	三 ／ 二	九 ／ 一〇	一 ／ 〇	擬音便	一 ／ 三	三 ／ 五	一 ／ 一五	二 ／ 三一	一 ／ 一〇	一 ／ 三三	二 ／ 一四	一 ／ 四〇	一 ／ 二一	二 ／ 一〇	一 ／ 一〇	二 ／ 三	
〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 二	擬音便	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 三	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 一	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	
二 ／ 一	八 ／ 四	一 ／ 〇	二 ／ 二	一 ／ 三	一 ／ 二	〇 ／ 一	一 ／ 〇	一 ／ 一	一 ／ 一	〇 ／ 一	〇 ／ 二	〇 ／ 四	三 ／ 一	四 ／ 〇	一 ／ 〇	擬音便	〇 ／ 二	〇 ／ 一	〇 ／ 六	〇 ／ 三	〇 ／ 八	〇 ／ 一八	〇 ／ 四	〇 ／ 二一	〇 ／ 二八	三 ／ 三	一 ／ 一	三 ／ 一	
五 ／ 一	二 ／ 四	一 ／ 〇	二 ／ 二	一 ／ 三	一 ／ 一	〇 ／ 一	一 ／ 〇	一 ／ 一	一 ／ 一	〇 ／ 一	〇 ／ 二	〇 ／ 六	三 ／ 一	四 ／ 〇	一 ／ 〇	擬音便	〇 ／ 二	〇 ／ 九	〇 ／ 七	〇 ／ 三	〇 ／ 七	〇 ／ 四	〇 ／ 一九	〇 ／ 二	〇 ／ 二七	四 ／ 三	五 ／ 一	四 ／ 一	
〇 ／ 一	二 ／ 三	〇 ／ 一	〇 ／ 二	〇 ／ 三	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 〇	一 ／ 〇	〇 ／ 〇	〇 ／ 五	〇 ／ 二	〇 ／ 二	〇 ／ 二	〇 ／ 二	〇 ／ 二	擬音便	〇 ／ 一	〇 ／ 三	〇 ／ 六	〇 ／ 八	〇 ／ 七	〇 ／ 三	〇 ／ 一	〇 ／ 四	〇 ／ 五	〇 ／ 三	〇 ／ 一	〇 ／ 一	
二 ／ 〇	八 ／ 三	一 ／ 〇	二 ／ 二	一 ／ 三	一 ／ 〇	〇 ／ 一	一 ／ 〇	一 ／ 一	一 ／ 一	〇 ／ 一	〇 ／ 四	〇 ／ 二	四 ／ 二	四 ／ 〇	一 ／ 一	擬音便	〇 ／ 一	〇 ／ 三	〇 ／ 六	〇 ／ 七	〇 ／ 六	〇 ／ 四	〇 ／ 一	〇 ／ 一五	〇 ／ 六	三 ／ 二	二 ／ 一	三 ／ 一	
一 ／ 一	一六 ／ 二〇	三 ／ 〇	二 ／ 一	二 ／ 五	二 ／ 九	三 ／ 一	二 ／ 〇	一 ／ 一	一 ／ 二	一 ／ 〇	〇 ／ 五	一 ／ 五	四 ／ 二	五 ／ 一	一 ／ 〇	擬音便	一 ／ 一	一 ／ 七	〇 ／ 九	四 ／ 一	四 ／ 八	〇 ／ 一	三 ／ 二五	三 ／ 二	一 ／ 二四	一 ／ 一九	五 ／ 一	七 ／ 三	

〈参考〉本書に音便形の見えない語(異なり数/総数)

	鴨脚本	弘安本	乾元本	丹鶴本	水戸本	寛文版本
イ音便	一〇/一	一五/二九	一四/三一	三/六	一五/二七	一七/六四
ウ音便	一〇/一	一六/三〇	一五/一五	三/三	一六/一六	一五/三一
促音便(無表記)	六/六	五三/九一	五三/一一七	五/五	四九/八二	二九/八〇
促音便(ツ表記)	〇/〇	〇/〇	二/二	〇/〇	〇/〇	三三/五二
擬音便	〇/〇	一七/二四	一三/三四	一/一	一八/二六	二二/四四

これを見ると、全体に本書の仮名本文に見える音便形は比較した六本の中では、寛文版本に最も近いことがわかる。促音便の無表記及び撥音便については、弘安・乾元・水戸の中世の代表的ないわゆる吉田本にも近い傾向が見える。但し弘・乾・水三本の撥音便形は、本書のそれが主に「ん」表記であるのに対して専ら「ム」表記である。次いでイ音便・ウ音便がこの三本に近い傾向が見えるが、促音便の「つ」表記は寛文版本以外にはほとんど一致しない。またより古態を有すると考えられている鴨脚・丹鶴は全体の加用例自体が少ないこともあるが、各形とも本書とはあまり一致しない。

従って音便形については、本書仮名本文は江戸時代前期の寛文版本に見えるそれに最も近いものであると言える。

敬語

日本書紀の訓読には、他の漢籍などの訓読に比べて敬語の使用が一般に多く、またその用いられ方に時代や加点者に依ると考えられる差異がかなり顕著に見えることについては、先に拙

稿でも明らかにしたところである(7)。

敬語についての諸本間の差異には様々な点があるが、用例数も多く全体的な傾向を比較しやすい点として、尊敬の意で用いられる補助動詞「ます」と「たまふ」の用いられ方がある。漢文訓読に限らず、一般に補助動詞「ます」は上代の資料に比較的多く見え、中古以降は神事に関わることがらなど特殊な場合を除いて専ら「たまふ」が用いられるようになってきたと言われている。

本書仮名本文に見える「ます」「たまふ」各々の用例数を先に取り上げた六本のそれを比較してみると以下のようなのである。

	たまふ	ます
假名神代	一九三	一二七
鴨脚本	一六	三七
弘安本	一九八	一五七
乾元本	一九九	一五四
丹鶴本	五五	一〇〇

水戸本	一八二	一四五
寛文版本	一七五	一四二

各本の間で、加点の密度が異なる以上、単純な数の比較はできないが、より古態を有するとされる鴨脚・丹鶴両本では「ます」の方が多く用いられるのに対し、弘・乾・水三本では逆に「たまふ」が多くなり、寛文版本では更にこれが著しくなるのであるが、本書は寛文版本よりも更に「たまふ」が優勢である。従つてこの点でも、本書は中世までの諸本より寛文版本に近いことがわかる。

己 個々の場面での敬語の用いられ方、つまり登場する神々の扱いには加点者の漢文本文に対する解釈が比較的明確に差異となつて現れやすい点がいくつかあるが、これらについて本書の傾向を他本と比較しつと見ると、

・天地開闢章で「天御中主尊」を他の神々より一段高く特別扱
いすることはない。

寛文版…ない。

先行の他本…ない。但し乾元本の別訓には若干その傾向がある。

江戸時代後期以降の注釈書などでは、明確に天御中主尊を高く扱うものがある。

・大八洲生成章で、「伊弉諾尊」を「伊弉冉尊」より一段高く扱うことはない。

寛文版…ない。

先行の他本…ない。

江戸時代後期以降の版本・注釈書には諾・冉二神に差を付けるものがある。

・瑞珠盟約章で「天照大神」を「素戔嗚尊」より一段高く扱う。

寛文版…扱う。

先行の他本…扱う。但し、寛文版ほど明確ではない。

寛文版以後の諸版本はより明確であり、本書にもかなり明確な差がある。

・天孫降臨章末尾出生譚部分で「彦火火出見尊」を他の兄弟神より一段高く扱う。

寛文版…扱わない。

先行の他本…扱わない。

寛文版以降の諸版本・注釈の類では、本書と同様の扱いが比較的多く見える。

のように、ほぼ寛文版本のそれと同様であるが、一部に先行の諸本とは異なる本書独自の扱いが見えることがわかる。

他に些末な事項ではあるが宝剣出現章で、

「あつたのはふりのつかさどりますかみこれなり」

(卷上六十丁表七)

という部分がある。これは「草薙剣」についてのことであるが、直前に「これ(草薙剣)はいま、をはりのくにのあゆちのむらにます。」とあるように、尊敬の補助動詞「ます」は剣に対して用いられるはずのものであり、他本でもこの部分は、

熱田祝部ハツリノ所掌ツカサドリマツル神是ミコレナリ

(弘安本卷上第四七紙七行)

のように、「熱田祝部」には謙讓の補助動詞「マツル」を用いている。これに対して寛文版本では、

熱田アツタノ祝部ハツリノ所掌ツカサドリマツル神是ミコレナリ

(卷一・三十七丁裏六行)

のように、本書と同様に「マス」を用いている。前後の内容から推してもこの寛文版本の例は、おそらく同本自体の誤読なのであって他書には類例がない。このことを考えると本書が「ます」を用いているのは、あるいは寛文版本のそれをそのまま用いた跡と考えることもできるのではないか。

その他の文法事項

個々の事項は枚挙に暇がないのであるが、顕著な数点を挙げると、先ず前項で述べた補助動詞「ます」の連体形を「まする」と下二段に活用した例が、瑞珠盟約章(卷上三十八丁表四行)と天孫降臨章(卷下十八丁表八)の二カ所に見える。

「ます」の下二段活用の例は他本では、

・未然形「マセ」

弘安…三(一)、乾元…三(一)、水戸…三

・連用形「マセ」

鴨脚…一、弘安…三(一)、乾元…三(一)、

・連体形「マスル」

鴨脚…一、弘安…二(二)、乾元…二(二)、丹鶴…一、

水戸…一(一)、寛文版…一

(一)内は挙げた例のうち第二訓など別訓の用例数

の例がある。このうち本書の天孫降臨章の例は他の六本共通に「マスル」の見える箇所であるが、瑞珠盟約章の例は他本にはない箇所である。

補助動詞「ます」の下二段活用の例は、中世以降「参らす」から生まれた「ます」との混交によって生じたものと思われ、

本書の用例もそのような事情から四段活用であるべき所に誤って用いられたものである。なお、明らかに謙讓あるいは丁寧の意で用いられた「ます」あるいは「まする」の例は本書には見えない。

また、いわゆる希望の意の助動詞「まほし」の未然形を「まほせ」とした例が、

「をらまほせじと……」

(宝剣出現章・卷上六十二丁表三行)

己 の一箇所ある。(形容詞型活用の助動詞「まほし」の例はない。)
 浦 この箇所については、弘安・乾元・水戸・寛文版の各本も同じ
 杉 く「ブラマホセジ(不欲居)」としており、本書の例もこれらを
 受けたものと考えられる。(これらの諸本にも「マホシ」の例は
 なく、国史大系本所引の御巫氏蔵永正七年本が当該の箇所を「マ

ホシカラ」とする例が見えるのみである。)この「まほせ」の形は、おそらく「まほし」と「欲つす」の混交から生じたものと思われるが、「まほし」自体の成立から推しても中世以降に用いられるようになった比較的新しいものであると考えられる。

さらに、いわゆる使役の意の助動詞「しむ」について、

すなはちかゞみつくりべのとほつおや、あまのぬかどゝい

ふかみをして、かゞみをつくらし、……にぎてをつくらし、
 ……たまをつくらしむ。

宝鏡開始章・卷上四十九丁表二行(傍線杉浦)

のような例がある。鏡・幣・珠と一連のことを述べているのであるから、「……しめ……しめ……しむ」とすべきなのであるが、おそらく「しむ」の連用形として「し」の形を用いたものと考えられ、この間には使役の意の助動詞「す」及び尊敬の意の助動詞「す」との混交が関与しているのではないかとも思われる。助動詞「す」について本書ではこの箇所の他に、使役の意味で未然形「さ」が一例、同じく「せ」が二例、連用形「せ」が一例、尊敬の意で終止形「す」が二例と連用形「し」が十七例見える。なお当該箇所について寛文版本は、鏡・幣・珠毎に文を区切って「……シム。」を繰り返す形になっている。

四 返読

一般に漢文の訓読で返読の仕方の特色が顕著に見える事項としては、助字の取り扱い、再読文字の扱い、使役の意の文の訓み方等を挙げることができる。また日本書紀(特に神代卷)の諸本間の差異については、これらの他に訓注部分の「此云……」の訓み方などがある。このうち助字と再読文字については、返

読するか否かと実訓か読み添えかが差異の主点となるため、本書の仮名本文のように漢字本文を離れて書き下された形になるとこれらはあまり明確には看取できない。従ってここでは使役の意の文と訓注部分の「此」字の訓み方を取り上げることとする。

使役の意の文

漢文一般の訓読で、「誰々に何々させる。」といったいわゆる使役の意の文については、現代広く行われている返読では「誰々」の部分に「ラシテ」を読み添え、「何々」の部分から文頭のいわゆる使役字(「使」「教」「遣」など)に返ってこれを「シム」と訓む、つまり「誰々ラシテ何々セ使ム。」のように訓む場合が多い。本書の仮名本文も先の語法の項で「しむ」について取り上げた宝鏡開始章の例のようにほぼこれと同じであり他の箇所も同様である。

しかし、寛文版本では同じ箇所を、

使^シテ^カ鏡^ミ作^{ツク}部^ブ遠^ト祖^ソ 天^{アマ}糠^ノ戸^ノ者^カ造^{ツク}ラ^シム^シ鏡^ミラ

(巻一・三十丁表八行)

のように、「誰々」の部分から返読して「使」字を「シテ」と訓

み、「何々」の部分の後に「シム」を読み添える形となっていて、これは弘安・乾元・水戸三本も同様である。

また「誰々」の部分から返読して「使」字を「シテ」等と訓み、「何々」の部分から再び返読して「使」字を「シム」等と再読とする訓み方もあつて、日本書紀の諸版本では黒羽版が、また漢籍一般ではいわゆる闇齋点(嘉点)がこのような例である。本書のように「何々」の部分から返読して「使」字を「しむ」と実訓で訓む(8)ものは、日本書紀の諸本では明治に入ってから刊行にかかる敷田年治『日本紀標註』(明治二四年刊)などの例があるのみで、本書の例はこの類の訓み方としては最も早い部類に入ると思われる。

訓注部分の「此」字の訓み方

日本書紀神代巻の訓注部分は例えば「葉木國此云播舉矩爾」のような形式がほとんどであるが、寛文版本や弘安・乾元・水戸三本をはじめ多くの伝本が「コレヲバ……トイフ」のように訓んでいる。しかし日本書紀神代巻でもより古態を有するとされる鴨脚本には「ココニハ……」とした例が見え、また下つて江戸時代後期に至ると、同じく「ココニハ……」の訓みをとったものが見えるようになる。これ以外にも「コレヲ……」「コハ……」「コヲ……」等とするものもあり、この部分の訓み方が諸本の訓読を分類する上での一つの指標になる可能性があること

とは先に述べたことがある(9)。

神代紀卷上下では該当の箇所は一三三(寛文版本で計数)あるが、本書の仮名本文ではこれらのうち一箇所(卷上七丁表二行)を「これをば・・」とするのみで他は全て「これを・・・」としている。管見の限り同様の「コレヲ・・」の形は、寛政五年の跋文を持つ小寺清先『校正日本書紀』が最も早い例であり、他には敷田年治『日本紀標註』などがあるが類例はあまり多くない。意味の上からすれば「コレヲバ・・」と「コレヲ・・」はほぼ同様の解釈に従ったと見ることもできるが、日本書紀諸本の訓読上の差異の上から見ると、本書仮名本文の大きな特色の一つである。

己 克 浦 杉

五 内容の齟齬

先にも述べたように本書仮名本文は漢字本文を逐一訓み下したものであって、内容上の遺漏や誤脱なども皆無に近いのであるが、一箇所宝剑出現章で、

かれそさのをのみこと、たちながらくしいなだひめになり。
ゆつのつまぐしをつくりてみづらにさし玉ひ。

(卷上五十六裏八行〜五十七丁表一行)

という部分があつて、内容的に不審である。

当該箇所の漢字本文は、

故素戔嗚尊立化奇稻田姫為湯津爪櫛而挿於御髻

(寛文版本 卷一・三十五丁裏一行〜二行)

となつていて、「立チナガラ奇稻田姫ヲ湯津爪櫛ニ為シテ・・」と解せる部分であるが、本書仮名本文では「為」字を「奇稻田姫」から続けて訓んでしまったために、このような文となったものと思われる。動詞字と目的語の基本的な位置関係を誤つたものであるが、逆に考えれば本書仮名本文が漢字本文を離れて独自に作成されたのではなく、漢字本文を逐字的に訓み下すことによつて作成されたものであることを示している例とも言えよう。

さらにつけ加えると、このような内容上の齟齬はこの箇所以外には皆無である。

六 まとめ

以上のように本書仮名本文は、日本書紀神代卷上下の漢字本文をかなり厳密に逐一訓み下した上で平仮名書きとしたもので、訓読の上でも元となった漢字本文のそれに依拠した部分が

多いのではないかと思われるものである。おそらく依つて立つた漢字本文は寛文版本あるいは類似の何本かであろうと思われるが、いくつかの箇所では積極的にこれを補正し、独自の見識で全体に統一された仮名本文を作成しようとした跡が窺われるものであった。特に撥音の「ん」表記や仮名遣等の点にこれは著しい。またバ行・マ行に関わる語の例や一部に見える和文的な語等他本にはない特色も窺えた。

此処に取り上げた以外にもなお詳細に検討を重ねるべき点は多いが、本書仮名本文の性格、及び日本書紀神代巻の訓読の変遷上への位置づけは大略可能となつたのではないかと考えている。

- (1) 杉浦克己「享保版假名神代紀について(一)―解題及び上巻翻字―」
「享保版假名神代紀について(二)―下巻翻字―」(放送大学研究年報第十一・第十二号)平成六年・七年)
 - (2) 橋本進吉「東京文科大學國語研究室藏假名日本紀に就いて」(『史學雜誌』第二十六編第七号・大正四年。橋本進吉博士著作集第十二冊『傳記・典籍研究』昭和四十七年・岩波書店に訂正稿所収)に取り上げられた東大本は、歌謡を中心に本文全体を抄録して仮名書きとしたものである。
- また拙稿「田嶋本神代紀について」(東京都立久留米西高等学校紀要第二号・平成二年)で紹介した架蔵の一本は、神代巻上下の内容に一書部分の順序を入れ換える等の改編を加えた上で全体を三巻としたものである。
- (3) 杉浦克己「六種対照日本書紀神代巻和訓研究索引」(平成七年・武蔵

野書院)及びその元となつた手元の基礎資料に基づいて比較対照した。

- (4) 国立国会図書館には本書と同版同刊記の一本が、また天理図書館吉田文庫には本書と同版とおぼしい四冊本がある。
また類似の書名を持つ本については、神宮司廳「神宮文庫図書目録」(大正十一年)に「假字日本紀」(寫本・三十冊)、「假字日本書紀」(天明六年藤原忠寄寫・十五冊)の名が見える。これは原本未見であるが、同目録のうち日本書紀関係諸本の中で注釈書と思われる類に並んで挙げられており、あるいは本書のような書き下し文のみのものでないのかもしれない。
- (5) 齋藤文俊「近世文語文における助動詞「シ」―漢文訓読文中の用法の変遷―」東京大学国語国文学会『國語と國文學』第六十八巻第二号(平成三年)
- (6) 杉浦克己「江戸期における日本書紀訓読についての一考察―神代巻の字音点」昭和六十一年度東京都教職員継続研修報告書(昭和六十二年三月・未公表)
- (7) 杉浦克己「江戸時代の日本書紀訓読について―神代巻の敬語表現を中心として―」『訓点語と訓点資料』第八十五輯(平成二年)
- (8) 本書の仮名本文と他本を書き下し文の形で比較すると、返読して実訓で訓むのか読み添えなのかは必ずしも明確ではない場合もあるが、例えばここで例示した宝鏡開始章の部分では、本書は仮名本文の「しむ」字の右傍に漢字本文「使」字が注されており、「使」字に返読して実訓で「しむ」とする訓み方に従つたものであることがわかる。
- (9) 前掲(3)及び(7)

なお本稿を草するにあたって、神宮文庫、天理図書館ご当局に資料の調査・閲覧に特段のご配慮を賜ると共に多くのご教示を賜つた。この場をお借りして改めて深謝申し上げます(次第である)。

(平成七年十月九日受理)

A Study of *Kyohoban-Kanjindaiki* III

A Comparative Study with the Other Versions of the *Nihonshoki*

Katsumi SUGIURA

ABSTRACT

Kyohoban - Kanajindaiki is a printed text of the first two books of the *Nihonshoki* published in 1719. This text is translated from Chinese into Japanese and written in Japanese *Kana* characters.

This text is not an adaptation or an excerpt of the *Nihonshoki*, but was translated literally. In terms of orthography, lexical meanings, and grammatical constructions, *Kyohoban-Kanjindaiki* demonstrates the characteristics of the medieval ages versions of the *Nihonshoki* that preceded it, as well as the Edo period Versions of the Chinese Classics. Accordingly, *Kyohoban - Kanajindaiki* can provide the historical development of the readings on *Nihonshoki* in modern ages.